



優
秀
賞

筑西市立下館西中学校三年

「らしさ」からの解放

泉 いずみ
日 ひ
和 より

皆さん、私の気持ちと将来の社会の在り方についての提言を聞いてください。

私は普段、あまりスカートを履きません。私は髪が短い方が好きです。自分の好きなものに囲まれて過ごし、考え、行動する時、一番自分らしく輝くことができます。

そんな私も、周囲からの視線や言葉を気にしてしまう瞬間が増えてきました。その中で今でも心に引つかかっていた離れないのが、「もう少し女子らしくしたら。」という言葉です。その一言は私にとって非常に不快で、心にざらりとした違和感を残します。なぜ女子らしく在ることが求められるのか、「生まれもった性別」に縛られる必要があるのか、どうしてなのか、納得がいかなかったからです。そもそも、

「女子らしさ」「男子らしさ」とは、どのようなものなのか。そんな疑問が、いつまでも尾を引いています。

社会に眼を向けてみると、「らしさ」の呪縛は日常至るところで私たちを取り囲んでいます。例えば、職場などで女性だからお茶出しをするという文化、男性だから家族の経済的支柱になるべきという考え方。早くに結婚し子育てをするのが幸せな人生そのものだというような固定観念。身近な生活の中にも思い当たることが多くあり、誰もが一度は違和感を覚え、疑問を抱いた経験があるはず。

「女子だから」「男子だから」という言葉で、一律のものさしを当てはめることは、一人ひとり異なる理想像や個性をゆがめ、生きにくさを生むことにつながると私は考えま

す。まさに男女平等を妨げる、何の解決にもならないのです。

今、世界では、社会課題を克服するための国際社会共通の目標として、十七項目からなる「SDGs（持続可能な開発目標）」が掲げられています。

「ジェンダー平等を実現しよう」という目標は、その中の一つです。ジェンダー平等を実現するための九つのターゲットのうち、特に私が注目したのは、「家庭内での仕事や子育ては、お金が支払われる仕事と同じくらい大切な仕事である」という考え方です。女性は仕事をせずに家にいるというかつての考え方から、女性が社会進出する手助けのきっかけになると感じたからです。性別や年齢だけにとらわれず、在りのままの自分で生きていい。「らしさ」というものさしからはみ出してもいい。職業や社会的役割の幅が性差を超えて広がることで、ジェンダーの平等に対する多様な意見や取り組みが増え、より一層、理解の浸透を目指せると思います。

私は、現代を生きる私たちや、未来の子どもたちの社会において、生まれ持った性別や年齢などを理由に「その人

らしさ」を制限することのない社会が理想であると考えます。私が主張したいのは、「女子だから」「男子だから」という言葉で窮屈な思いをする人がいるということ、社会的通念やステレオタイプな価値観で評価しがちな考え方を直し、「らしさ」という言葉で当たり前にしないしてほしいということ。同時に、私たち未成年にもできることは多くあります。例えば、いじめや、人を見た目で決めつけるといった身近な現状にも目を凝らすことです。そして、そのような状況を少しでも減らすために、相手の立場を考え、互いに理解しようとする姿勢を持つということです。人種や身分差別の違いが生む悲しい差別の現状を自分事として受け止めることです。どのようにしたら差別がなくなるのか、他人を傷つけない心を持てるのかを考え、その気付きを、一人一人が日常生活の中で実践することが大切だと思います。

互いに尊重し合い、誰もがかけがえない自分として生きられる社会へ。社会が名付けた「らしさ」から解放されて、堂々と生きられる社会を実現することが、現代社会に生きる私たちの責任なのではないでしょうか。